

田原市博物館 平成30年企画展

豊川用水通水50周年記念

渥美半島の

農業の

歩みと

豊

川

用水



田原市博物館

# 日本一の渥美半島の農業

平成17年(2005)に田原・赤羽根・渥美の三町が一つになって今の田原市となって以来、田原市は市町村別で農業産出額が多い自治体のひとつです。平成26年813億円、平成27年820億円、平成28年853億円であり、全国1位となっています。

田原市では、露地や施設での野菜・花きの栽培や畜産が盛んです。露地栽培では、キャベツ、ブロッコリー、メロン、レタス、スイカ、トウモロコシなどが栽培され、施設園芸では、トマト、メロン、キク、カーネーション、バラ、洋花、鉢物などが栽培されています。露地や施設で栽培される作物の多くがトップクラスの産出額を誇っています。畜産は、乳牛、肉牛、豚、鶏と多様で、どの畜種も衛生的で適切な飼養を行える施設で育てられ、質の高さから地域のブランドになっているものもあります。

田原市の農業に大きく貢献した出来事として、昭和43年(1968)の豊川用水の通水があります。通水によりこれまで渥美半島の人々が悩まされてきた渇水の問題から解放されました。さらに、通水に合わせて、耕地整理や温室や畜産団地の造成が行われた結果、全国でも有数の農業地帯として成長しました。

しかし、ここで不思議に思うのは、豊川用水と同じ時期に同じように作られた用水は複数ある中で、なぜ渥美半島の農業がとりわけ発展したのかということです。この謎の裏には、豊川用水通水以前に渥美半島の農業を作っていた先人たちの取り組みがありました。

本冊子では、渥美半島の農業の転換点で役割を担った先人たちが、どのような働きをしたのかを見ていくとともに、豊川用水が渥美半島の農業にどのような影響を与えたのかを見ていきます。



## ◆キャベツ

キャベツは、昭和の初めから栽培されており、豊川用水の全面通水を契機に作付面積が増加した。現在では市全域で栽培され、露地野菜の秋冬作の基幹作物となっている。最近では、減農薬や減化学肥料への取り組みを行うなど、安全・安心でさらにおいしいキャベツづくりがなされている。また、作付面積・出荷量とも多く、国内において有数の大産地である。出荷時期は10月下旬から6月中旬ごろまで。



## ◆メロン

露地メロンは昭和30年代後半から、プリンスメロンをはじめとして、年々作付面積が増加した。「アールス」「タカミ」「クレオパトラ」「ホームラン」「プリンス」などのさまざまな品種が、露地畑やビニールハウスなどで栽培され、5月中旬から7月中旬にかけて出荷されている。温室メロンは、恵まれた立地条件を活かして、キク、トマトとの輪作体系により昭和40年代から急速に普及してきたが、産地間の競合、価格不安定、トマトやキクなどへの周年栽培体系への移行などにより、作付面積は減少してきている。近年は、ブランド化を目指し、優良品種の選定、出荷組織の強化、栽培技術の向上を目指している。出荷時期は6月中旬から10月ごろまで。



◆トマト

トマトは、昭和40年代のなかばから施設での安定した生産が続けられてきた。昭和50年代からは、ファーストトマトの栽培に加え、ミニトマトの作付面積も増加してきた。ファースト系は12月中旬から5月下旬の出荷で、全国一の出荷量がある。ミニトマトは、8月を除き年間を通じて出荷されており、近年は甘くて美味しいものへと品種の改良が進められている。



◆キク

キクの栽培は、昭和24年の試作が成功してから、露地、施設で盛んに行われてきた。現在では、施設による栽培が大半を占め、1年を通じて計画的に生産され出荷されている。キクの生育を電照により調整するため、「電照菊」と呼ばれる。年間を通して出荷されており、平成18年の農業産出額では、全国1位となっている。



◆バラ

バラは、バイオ技術の進歩により、「青いバラ」をはじめ、多種多様な色や品種ができてきた。市内でのバラの栽培は、ほとんどがロックウール栽培で行われている。肥料や温度管理など、近代的な技術を活用し栽培されている。平成18年の農業産出額では、全国1位となっており、年間を通して出荷されている。



◆牛

乳牛のうち県内で飼育されている頭数のおよそ23%が田原市内で飼育され、平成28年の農業生産額では県内1位となっている。牛乳のブランドとしては「渥美半島酪農牛乳」「どうまい牛乳」などがある。肉牛のうち県内で飼育されている頭数のおよそ31%が田原市内で飼育されており、平成28年の農業産出額では県内1位となっている。牛肉のブランドとしては「あつみ牛」「田原牛」などがあり、肉のうまみが凝縮された味には定評がある。それぞれのブランド牛には、厳しい品質規格が設けられている。



◆豚

県内で飼育されている頭数のおよそ32%が田原市内で飼育されており、平成28年の農業産出額では県内1位、全国でも10位の豚肉の生産地となっている。徹底的な衛生管理のもと、良質な豚肉が全国に供給されている。

※各作物のキャプションについては田原市農政課提供の資料を参考に作成した。

# 渡辺崋山と大蔵永常が目指したもの —先進性への不適合—

天保5年(1834) 田原藩家老の渡辺崋山は農学者であった大蔵永常を田原藩に招聘し、当時困窮を極めていた藩財政を立て直すために田原に新しい産業を興そうと考えました。



渡辺崋山(1793~1841)

大蔵永常は、豊後国(大分県)日田に生まれ、農学を志し、西日本各地の農村を見て回り、商品作物の生産・流通法、効率の高い米作、農機具の改良等の技術と知識を身につけました。それを書物として出版し、世に知られた農学者でした。



大蔵永常(1768~?)  
「門田の栄」より

永常の殖産思想は当時市場経済が発展していた大阪を中心とする西国で習得したもので、お金がある西国の農村をモデルケースにしていました。永常の考えた殖産の方法は①土地にあった作物の栽培法を実演紹介し、②研究熱心で余裕のある農家たちが、紹介された農法を取り入れ作物を生産し特産とし、③藩が都市の市場に販路を作り、高く売ること、長期的に地域の産業の発展を図る、というものでした。

田原でも永常は、楮こうぞの栽培と製紙はぜ、櫨はぜの木の栽培とろうそく製造、砂糖の製造、田の二毛作化、土人形の製造など様々な産業を構想し、実演を行ったといわれています。しかし、西国ほど裕福でない田原の農家では、これらの新しい産業を受け入れるだけの余裕がない状況でした。加えて、

天保7年(1836)から田原でも飢饉が起り殖産どころではなくなりました。また田原藩も財政的に疲弊しきっており、長期にわたって永常の殖産施策に投資する余裕がありませんでした。

田原藩の記録には、天保6年(1835)に永常が砂糖の製造に成功し藩主に献上した記述があるものの、本格的な産業としてこの地に根付いたものはなく、唯一土人形のみが明治の中ごろまで田原で製造されたといわれています。

藩の財政立て直しの観点から短期で成果を求めている崋山は、長期的な殖産を目指し、短期的な成果を出さない永常に不満を抱くこととなります。田原藩内部にも永常の抜てきをよく思わない者が多く、結果、天保10年(1839)の蝨ばんしゅ社の獄で崋山が蟄居ちつきよとなると、後ろ盾を失った永常は田原藩を離れることとなります。

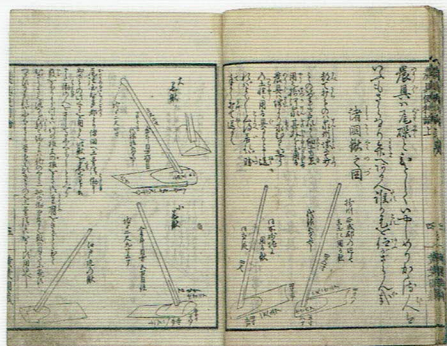
市場経済を前提とした、高収益の農業を目指した崋山と永常の考えは、田原の現状と合わず失敗しました。しかし、明治を迎え、近代化していく中で田原の農家たちが目指したのは崋山と永常が目指した農業に近いものでした。



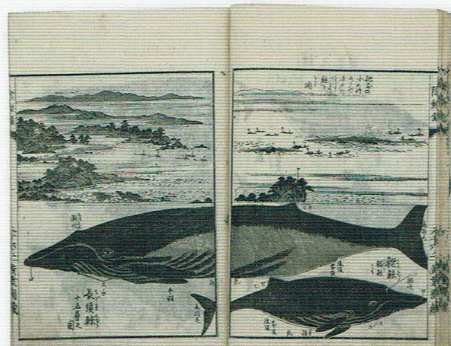
土人形  
幕末ごろに作られた土人形の型。  
明治の中ごろまで田原で作られたといわれる。



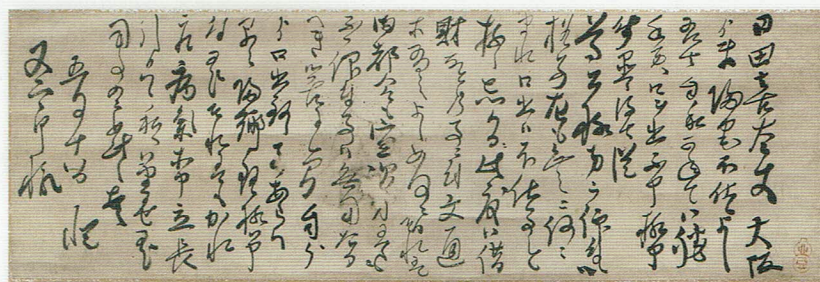
**門田の栄**  
大蔵永常 天保6年(1835)  
永常が田原藩の領民向けに書いた本。物語形式で西国の農民が三河の農民に進んだ農法を教え諭す内容となっている。



**農具便利論** 大蔵永常 文政5年(1822)  
永常が諸国の農村を見聞する中で、調べた農具の特徴が書かれている。ただ絵と文章だけで説明するのではなく、例えば鍬であれば、刃の幅、長さ、角度、柄の長さなどの要所の寸法とその用途まで書いてある。



**除蝗録** 大蔵永常 文政9年(1826)  
当時の最新式の農法である鯨油を利用した稲の害虫であるウンカの駆除法について説明した書物。このウンカの駆除法は太平洋戦争後まで用いられ、日本の米の生産向上に大きな貢献をした。



**川澄又次郎宛書状**  
渡辺華山 天保7年(1836)ごろ  
田原藩家老である川澄又次郎へ華山が出した手紙である。なかなか殖産の成果が出ない中、永常(日田喜太夫)が藩財政にまで口を出し、大坂に借金関係の用件で出かけたことに対して、華山が不満に思っている文面である。他の華山の手紙の中にも成果を出さない永常に対する不満がたびたび出てくる。



**広益国産考** 大蔵永常 安政6年(1859)  
永常が晩年に集大成としてまとめた本。さまざまな商品作物の栽培法や流通の方法がまとめられている。「為政者が長期的な視点で育成しなければ産業は発展しない」という旨の記述があり、中途半端な形で殖産を諦めることとなった田原藩を念頭に置いた発言ともとれる。



**池ノ原幽居跡(復元)**  
もともとは永常の屋敷で、通称御物産屋敷とよばれた。後に華山が切腹するまで晩年を過ごすこととなる。華山が切腹した母屋の隣の小屋は、永常が砂糖の製造に成功した場所で、現在の渡辺華山の銅像の位置にあった。

# 野田の耕地整理

## —農村の近代化の始まり—

江戸期までの年貢は物納で、しかも収穫量によってその税額は上下するものでした。しかし、明治を迎え、近代化のために膨大な金を必要とした政府は、税を物納から金納に改めます。明治6年(1873)に政府は地租を地価の3%(明治10年に2.5%に改正)としました。

地価が高く設定された地域にはこの税率は厳しいもので、農村は対策を迫られました。しかし、反面、収穫量に左右されない、一律の税率であったので、工夫によっては、収入を大きくする可能性も秘めた制度でもありました。

野田村(田市野田町)は旧田原藩地内で一番米の収穫量がある村であり、地租にかかわる課税額も最も大きいものでした。また、農家たちは、米をお金に変える必要性に迫られることで、これまで以上に貨幣経済の中に組み込まれていきました。お金が手元にあることで、野田村では賭博、贅沢などが広がり、野田村の人々の資産は流出し、税の重さや、米価の暴落もあり、村全体が次第に経済的に行き詰まることとなりました。

明治24年(1891)に野田村の村長に就任した河合為治郎は、荒廃しつつあった野田村を救うために時代にあった策を講じます。まず、二宮尊徳の経済・道徳の思想を普及する目的で設立された「三遠農学社」の協力を受け、養蚕や芋作、麦作な



河合為治郎(1850~1931)

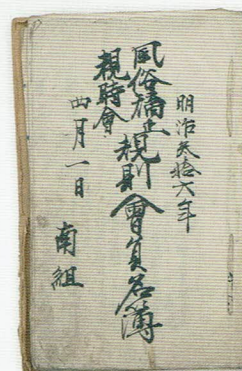
ど、お金になる作物の栽培をすすめました。また、野田矯風会(野田の習慣を正しく直す会)を設立し賭博や贅沢など、資産の流出の原因となっていた悪い習慣を禁じました。これを破ったものについては厳しい罰則が制定

されました。

経済的に持ち直した野田村では、さらに、収入を増やすために、これまで、田原で大規模に行われることがなかった耕地整理を行うこととなります。明治39年(1906)から始められた工事は、4年半にわたるものでした。村民自身によって行われたこの工事によって、古くからの深田は姿を消し、耕作幹道(幅2.7m)、支道(幅1.8m)が碁盤の目のように走る乾田が完成します。

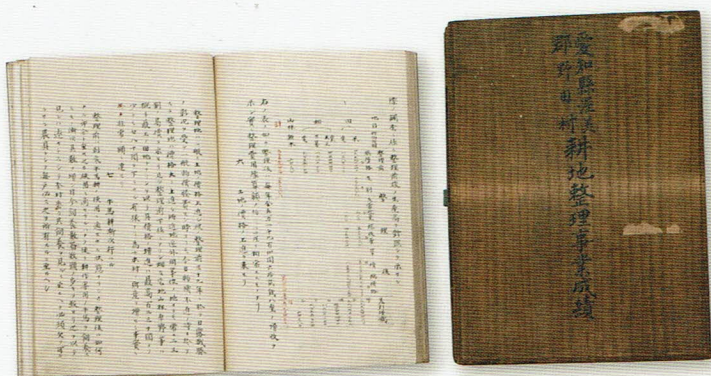
耕地整理の成果として野田村の田畑は①導水・排水の便がよくなる②干ばつに強くなる③交通運搬の便がよくなる④生産物の質・量が改善する⑤牛耕がどこでも行えるようになる⑥耕地面積が増加する⑦乾田化により二毛作が可能となる、というように大変利便性が高く、収益も大きい近代的な田として生まれ変わりました。当時の野田村の調査によると、元の約2倍の収益を上げたそうです。この成果により野田村は政府から明治43年(1910)に「模範村」として表彰を受けます。

この野田の様子を見て渥美半島の神戸、大久保、泉、伊良湖をはじめとする多くの村で耕地整理が行われ、江戸期までの田畑が時代に合った効率性の高い田へ生まれ変わっていきました。この時期を境に、渥美半島では、効率性と収益を重視する、江戸時代までとは異なった農業が営まれるようになりました。



風俗矯正規時會規則會員名簿  
明治36年(1903)

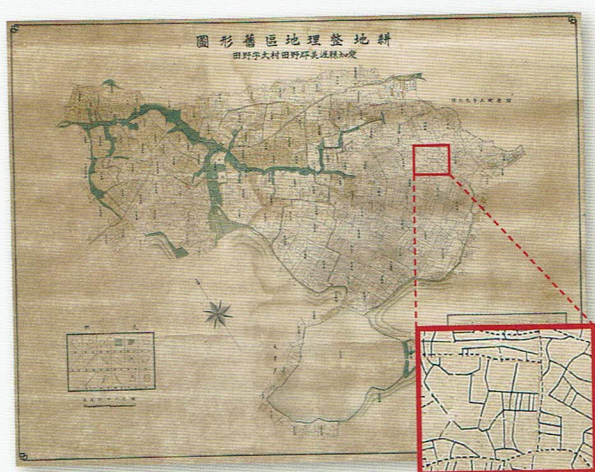
野田では全村を挙げて徹底して悪い習慣の改善を目指した。



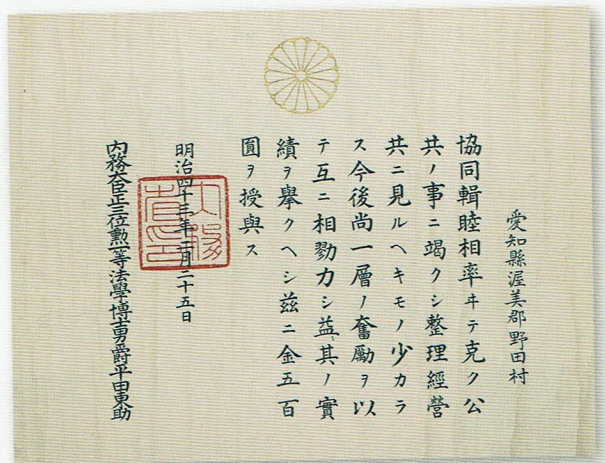
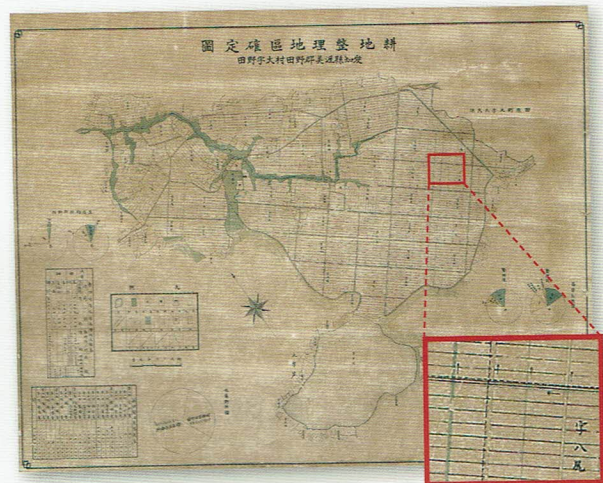
耕地整理事業成績 明治43年(1910) 野田校区コミュニティ協議会蔵  
野田村によって作られた、耕地整理事業の成果のまとめ。生産高ベースで57,559円から109,464円と約2倍の増加となっている。畑地を田へ転換することで生産高を高めている。



三遠農学社<sup>ちようなんす</sup>帳簿箱  
三遠農学社野田支部の帳簿箱。中には農業技術講習大会の参加者名簿や、会計関係書類が納められている。これらの書類からは、野田支部主催で農業技術の講習大会等が頻りに開かれ、近隣の農村から多くの参加者があったことがわかる。



三遠農学社会報 明治36年(1903)  
会報では、農業の技術の紹介以外にも家庭内での教育、道徳面の育成の大切さなども説かれている。



耕地整理旧形図(上)・確定図(下)  
明治42年(1909) 野田校区コミュニティ協議会蔵  
古代から続く、野田の田畑は近代的な規格化された形へ変化した。

優秀農村賞状 明治43年(1910) 野田校区コミュニティ協議会蔵  
整理事業の成功と、村の生産の向上に対して内務省から表彰を受けた。

◆生産高比較表

単位：円

	田		畑			山林	計
	米	麦	粟・大豆	甘藷	麦	雑木	
整理前生産高	43,392.24	1,287	4,444.44	1,616	6755.364	64.38	57,559.424
整理後生産高	76,016.7	33,447.35	—	—	—	—	109,464.052

(耕地整理事業成績より) 増加額 51,904.628

# 近藤寿市郎の豊川用水構想

## — 渥美半島での米の増産 —

赤羽根地区の高松村に明治3年(1870)近藤寿市郎は生まれます。近藤は豊川用水の元となる構想を考え出し、その構想の実現に尽力した人物として知られています。近藤は高松村役場に勤め、わずか25歳で村長に選ばれ、それ以降、渥美郡会議員、愛知県会議員、衆議院議員、豊橋市議会議員、豊橋市長と政治家としてのキャリアを歩むこととなります。



近藤寿市郎(1870~1960)

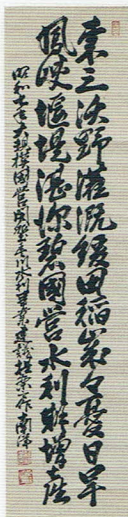
豊川用水の元となる構想を得たのは、愛知県会議員を辞職した後、大正10年(1921)7月から行ったシンガポール・マレーシア・インドネシアでの視察からです。この視察の動機について「僕が南洋視察を思い立った原因は、わが国の人口が年々歳々増えるのをみて、国民生活の安定を期せしむるには農地開発、干拓、水利などの工事を起し二毛作を奨励するか、また一面海外移民政策を立てるのほかなしと考えたのであった。」(近藤寿市郎「今昔物語」)と述べています。つまり近藤は食料増産を目指し、特に「二毛作」といっている事からもわかるように主食である米や麦の増産の方法を模索していました。

当時、インドネシアはオランダの植民地となっており、そのインフラ整備は進んだものでした。それを目の当たりにした近藤は「谷川の水利は高い高い山の頂上まで鉄管にて取り傾斜面の山腹は段を刻んで棚田を

なし、ジャワの農耕は実に水利が長けていて至れりつくせりで、僕はこのを見て鳳来山山脈に堰堤を築き大貯水池を設け豊川に落とし渥美郡を始め東三河の灌漑用水を作るべきヒントを起こしたのである。」(近藤寿市郎「今昔物語」)と考え、それ以降、農業用水を東三河に建設することを目指していきます。

近藤は帰国後、大正12年(1923)に県会議員に復帰し、多くの人々の協力を得て、用水の具体的な計画を作り上げていきました。昭和2年(1927)に渥美郡と八名郡が政府の大規模開墾計画の候補地に選定され、これをきっかけに、国から技師が派遣され、近藤の用水構想を中心とした開墾計画である「愛知県渥美八名二郡大規模開墾計画」が策定されます。この計画の中ではやはり、稲作が重視されています。新たに渥美と八名で合計4400haの田を造成する計画でした。この計画の主目的は、作られた田に水を十分供給し、米の生産を高めることにあり、戦後豊川用水の大きな役割となる畑地灌漑はほとんど考慮されていませんでした。

この計画は、日本の戦争拡大の時局の中で、財政的、軍事的問題から実現することはありませんでした。しかし、もし、実現していたら今の渥美半島の農業は全く異なったものとなったかもしれません。近藤が米を重視した理由については、当時の日本の政策で米の増産を求めていたこともありますが、それ以上に、当時渥美半島の作物で米以上に価値がある作物が知られていなかったこともあるでしょう。ちょうどこの計画が作られる前後に、渥美半島で「米、サツマイモ、麦」以外の新しい農業が行われることとなります。



近藤寿市郎書

昭和7年(1932)

旧赤羽根町土地改良区蔵

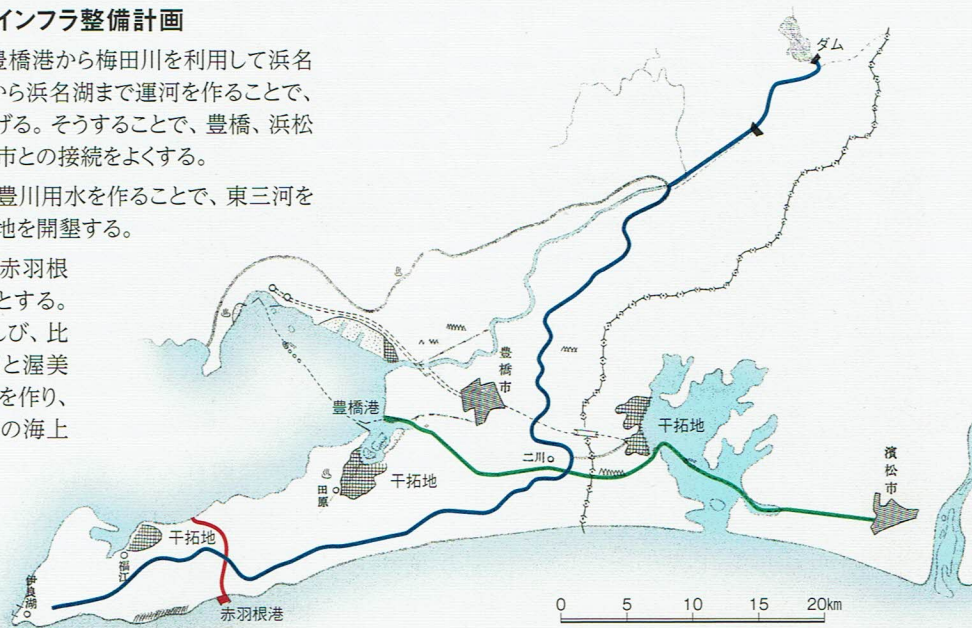
内容「東三河の豊かな農地は水に恵まれず、田の稲は毎年のように日照りで枯れてしまう、鳳来の山にダムを築いて水を沢山ためれば、国営水利事業は大きな増産につながるだろう。」渥美半島に用水を作り農地を潤す近藤の決意が綴られている。

和暦(西暦)	年齢	出来事
明治 3年(1870)		愛知県渥美郡高松村に誕生する
明治23年(1890)	20歳	高松村書記となる
明治26年(1893)	23歳	高松村助役となる
明治28年(1895)	25歳	高松村村長に推挙されるが辞退する
明治36年(1903)	33歳	渥美郡会議員に選出される
明治44年(1911)	41歳	愛知県会議員に初当選する
大正10年(1921)	51歳	5ヶ月間に渡り南洋(シンガポール・マレーシア・インドネシア等)を視察する
昭和 5年(1930)		愛知県が寿市郎の構想をもとにした「愛知県渥美八名二郡大規模開墾土地利用計画書」を発表する
昭和 7年(1932)	62歳	愛知県第5区選出衆議院議員に当選する 大規模開墾実施に関する建議書を帝国議会に提出する
昭和11年(1936)	66歳	豊橋市会議員に当選する
昭和14年(1939)	69歳	豊橋市助役となる
昭和16年(1941)	71歳	豊橋市長に就任する(昭和20年4月に任期満了) 太平洋戦争が勃発
昭和20年(1945)		政府が「緊急開墾実施要領」を発表する
昭和24年(1949)		豊川農業水利事業所が開設され、宇連ダム建設工事が着工される
昭和33年(1958)		宇連ダムが完成する 大野頭首工の工事が着工される
昭和35年(1960)	89歳	死去 4月21日に豊橋で市民葬となる



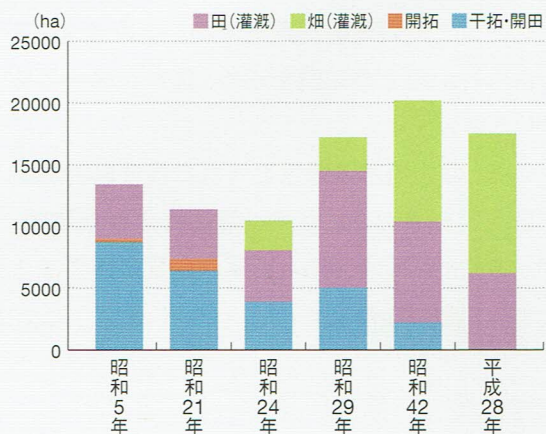
### 近藤寿市郎の東三河のインフラ整備計画

- 豊橋港を修築し、さらに豊橋港から梅田川を利用して浜名湖まで運河を作り、浜松から浜名湖まで運河を作ることで、豊橋と浜松を運河でつなげる。そうすることで、豊橋、浜松両都市と日本の他の大都市との接続をよくする。
- 鳳来寺山脈にダムを築き豊川用水を作ることで、東三河を中心に1万町歩以上の農地を開墾する。
- 赤羽根村池尻川河口を「赤羽根港」として避難港兼漁港とする。加えて、赤羽根港からへんび、比留輪原、八王子、江比間と渥美半島を切断する形で運河を作り、難所といわれる伊良湖沖の海上交通の便をよくする。



※豊川用水土地改良区作成の昭和29年のパンフレット『豊橋市を中心とする地域は今後どのように発展するでしょうか』を修正し、近藤寿市郎の構想を落とし込んだ。

### ◆豊川用水計画に見る受益面積の推移



昭和24年にGHQからの指導により畑地灌漑が計画に盛り込まれるまで、豊川用水は田のための用水であった。その後ダムの嵩上げなどの設計の変更などにより受益地の範囲はその都度変化した。

### ◆豊川用水の幹線水路の変化

昭和5年の計画では、用水路は高松付近から芦ヶ池へ大きく迂回し、そのまま伊川津まで伸びていく。背に山を背負っている若見から和地では広い水田は望めないからだ。そのため、受益地に施設園芸の中心地となる若見、池尻、和地等は含まれていない。

現在ある豊川用水は、南側が高く北側が低い渥美半島の地形を利用した水路となっているが、サイホン、トンネル等を利用し、渥美半島全域を効率よく潤せる形の水路となっている。

- 愛知県渥美八名二郡大規模開墾計画地区平面図より(1930年)
- 現在の豊川用水東部幹線水路



愛知県渥美八名二郡大規模開墾計画地区平面図 昭和5年(1930)作成  
近藤寿市郎の計画をもとに作られた豊川用水の水路の計画図面。今の用水との大きな違いは、サイホンやトンネル等を極力使わず、開水路で宇連ダムから渥美まで結んでいる点と、蒲郡方面の幹線が存在しない点である。

# 施設園芸の始まりと発展

## —高収益農業の萌芽<sup>ほうが</sup>—

水が無い、しかも、強い酸性土である渥美半島では作ることのできる作物が限られていました。昭和の中ごろまでは渥美半島の畑でできる作物は、夏はサツマイモ、冬は麦が中心となる貧しいものでした。



岡田儀八(1900~1989)

そのような状況の中、新しい技術を導入することで、高い収益を目指す農業をこの渥美半島で行うことを考えた人がいました。小塩津の研究熱心な農家であった岡田儀八です。昭和初期の渥美半島ではイモや麦という作物の埋め合わせのために、桑を作り養蚕を行うことで現金収入を得ていました。しかし、安定した収入にはならず、さらに、この地域でなくとも代わりはいくらでもあるものでした。儀八は養蚕の代わりとなる渥美半島ならではの作物を作らなければ渥美半島の農業は先が無いと考えたようです。儀八は渥美半島の温暖な気候を利用した「温室を利用した施設園芸」に可能性を見出しました。儀八は既に先行して施設園芸を行っていた豊橋市北



中島駒次  
(1867~1950)

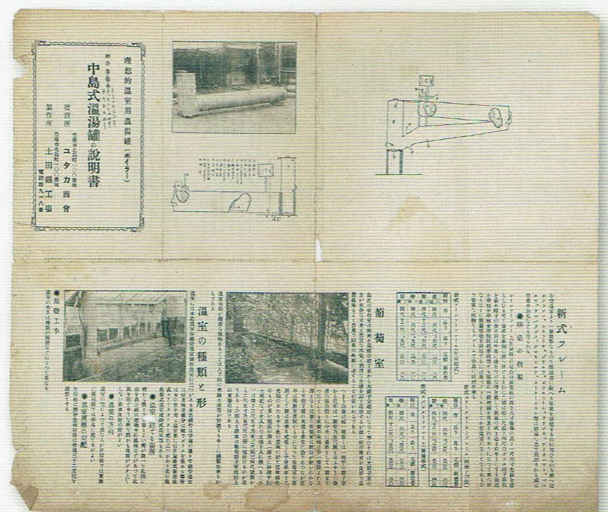
駒次は広く日本各地から弟子を受け入れ、温室技術の伝授に努めた。

島町の中島駒次のもとへ弟の儀兵衛を弟子入りさせ、温室の技術を小塩津へ導入します。昭和7年(1932)3月に530円で53坪の温室を建て、この温室で儀八は促成、抑制栽培の技法を使い本来の出荷時期をずらして、メロン、キュウリ、ナスを出荷し、一年で970円の収入を得ます。この金額は温室の建設費用を一年で取り

返し、さらに大きな利益をもたらすものでした。この儀八の成功を目の当たりにし、小塩津を中心として、渥美、赤羽根地域の農家は施設園芸を積極的に取り入れ、熱心に研究を始めます。

地元農家の施設園芸への熱意を受けて、県や郡、農協、郡園芸組合の共同で、昭和27年(1952)に和地に渥美郡暖地園芸試験場が設けられます。この試験場は、渥美、赤羽根等の農業を志す若者を練習生として受け入れ、菊の栽培密度や電照菊の品種選定、露地栽培作物の選定等、これまで、個人の経験によっていた知識を体系的に伝えました。農業を行う上での基礎知識を得た若者たちは、自らの営農の中でその知識を深め、独自の競争力を獲得していきます。

この後、豊川用水の通水とそれに伴う農村基盤の整備が行われると、儀八以降に育まれた知識・技能が本格的に活かされ、田原の農業の規模は急拡大することとなります。

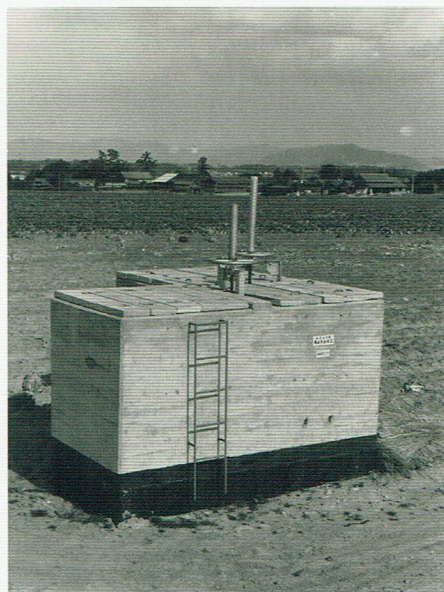


中島式温湯罐の説明書 個人蔵

駒次が発案した温室ボイラーの説明書。研究・教育目的でしか使われなかった加温式の温室を農業に導入したことは、非常に革命的なことであった。渥美半島ではまず無加温の温室が使用された。

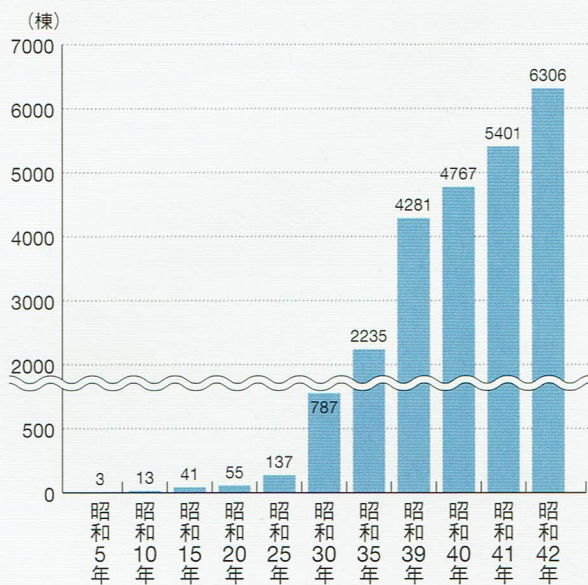


暖地園芸試験場 昭和30年代 個人蔵  
 かつての和地小学校の裏手の傾斜地に建てられたため、大規模な農業試験には向かなかった。狭い土地でもできる温室での花きの栽培の研究が中心に行われた。



コールタールが塗られた分水機  
 昭和40年頃 (独)水資源機構蔵  
 六連周辺の写真。この写真には強酸性土質PH2.7と注記されていた。この酸性度はコンクリートすら侵す強いもので、建造物にコールタールが塗られ保護されている。この酸性土壌も農業の選択肢を狭める一因となっていた。

◆豊川用水通水までの渥美郡の温室棟数



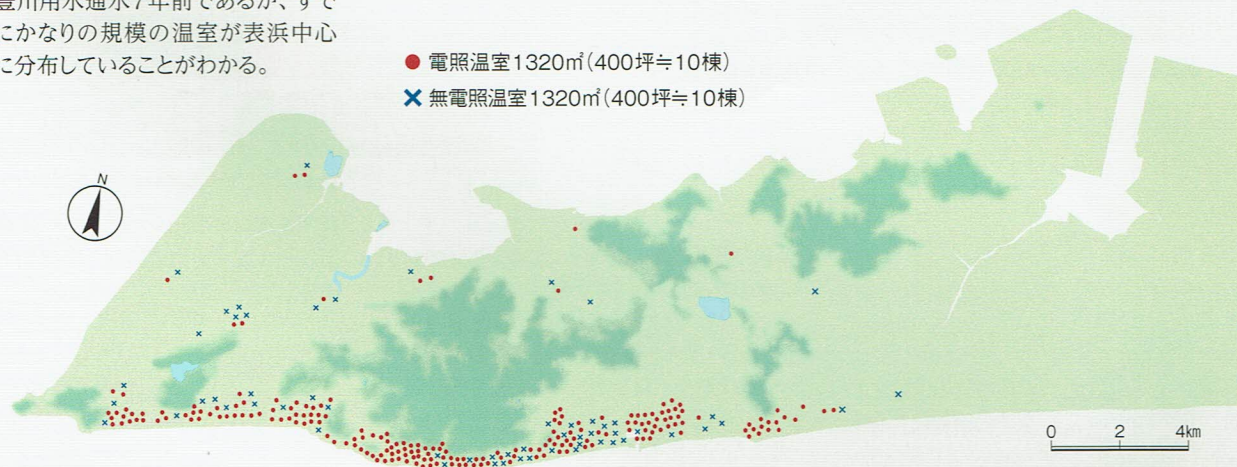
地方調査機関全国協議会 1969「地域と産業」による



木造温室内部写真 昭和3年(1928) 個人蔵  
 儀兵も学んだとされる、豊橋の中島温室。渥美半島でも、初期の温室は木造フレームにガラスをはめて作られた。

豊川用水通水前の温室分布(昭和36年4月)

豊川用水通水7年前であるが、すでにかんがりの規模の温室が表浜中心に分布していることがわかる。



※松井貞雄 1967「渥美半島における温室園芸の地域形成と地域文化」による

# 豊川用水の建設と農村基盤の整備

—豊かな農業へ—

昭和36年(1961)に豊川用水建設事業の総事業費が335億円(昭和42年に488億円に変更)と決まり、渥美半島への通水が確定的なものとなり、加えて、同年に制定された農業基本法により、「農業生産の選択的拡大」が方針として示されました。この方針により、個々の農業の規模を大きくするとともに、米中心の農業から、野菜、畜産、果樹等中心へ転換を目指すこととなります。この国の方針転換は、これまで地道に野菜や花卉の栽培を中心に栽培技術を蓄積してきた渥美半島の農業にとって、大きな追い風となります。

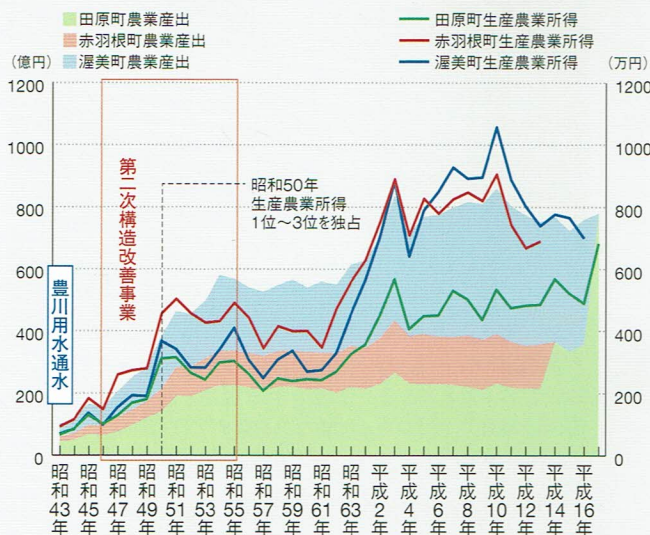
国の方針に合わせてさまざまな形で渥美半島で「農業構造改善事業」が行われました。ひとつは、地域の土地改良事業で、この事業はこれまでの土地改良とは比較にならないほど大きな予算、大きな規模のもので

した。各地区で組織された土地改良区等により土地改良が行われ、渥美半島のほぼすべての農地が10aから30aの広さで規格化されます。また、開墾も行われ、雑木林等が造成され畑となり、田原町では400haの農地が作られました。

同時に、渥美半島の各地で畜産・施設園芸団地が造成されます。これらの事業は、50%以内の補助金が交付される上に、40%の低利の制度融資も受けられたため、農家たちはこぞって設備投資を行いました。

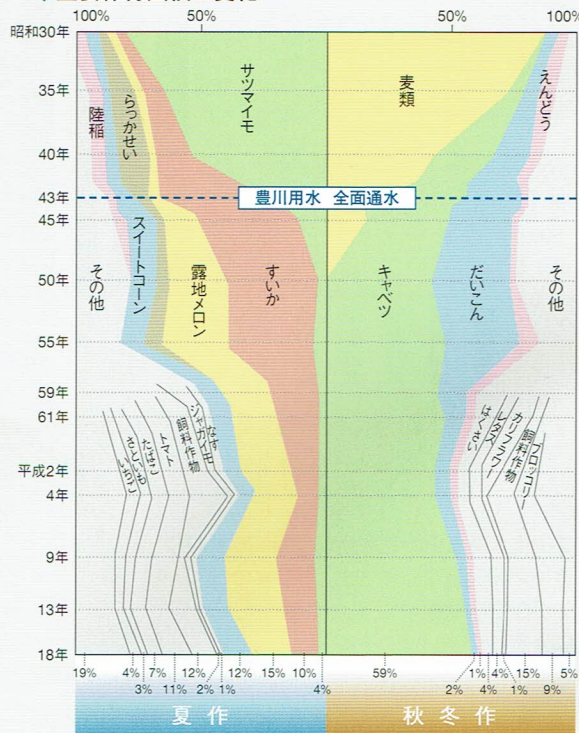
これらの大規模な公共投資と、公的援助によって、農家たちは農業を行うための最適な環境を獲得し、それに伴って渥美半島の農村の風景は大きく変化していくこととなります。

## ◆田原市の農業産出額と農家一戸当たりの生産農業所得の推移



農林水産省「生産農業所得統計」「東海農業市町村別累年統計書」より

## ◆主要作物面積の変化

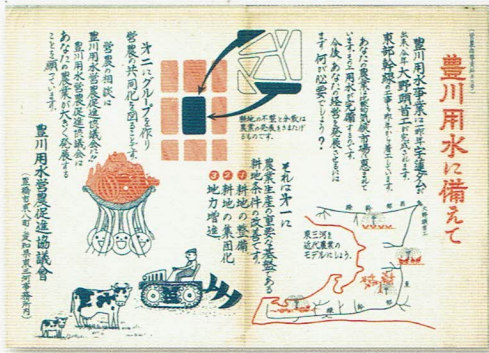


東海農政局「愛知県農林水産統計年報」より

通水を機にサツマイモと麦中心の農業から大きく変化し、様々な作物を作ることができるようになった。

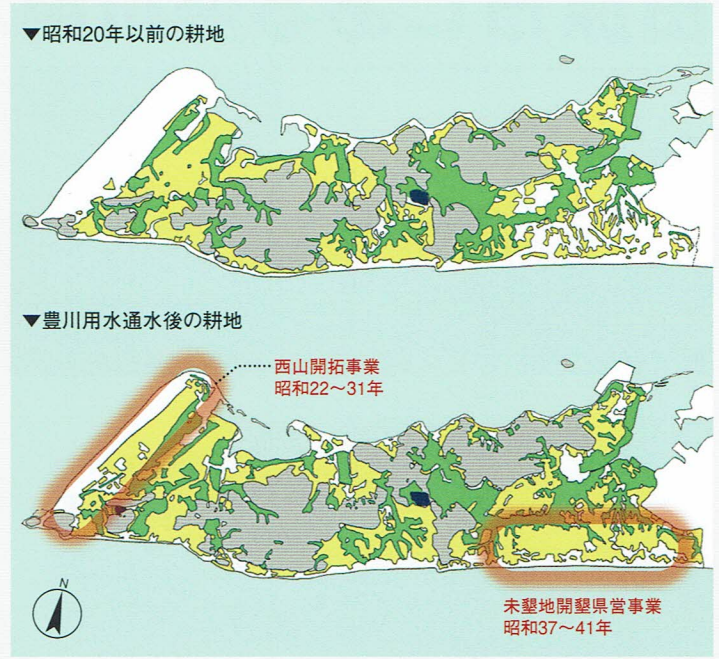


「水の歌」原稿 山田もと 昭和56年(1981)  
 「水の歌」は田原在住の童話作家、山田もとの作品。昭和の初めころから豊川用水通水ごろまでの渥美半島の農村の情景を一人の老女の目を通して描いている。豊川用水建設に沸き立つ人々の姿と併せて、昔ながらの価値観や風景がなくなっていくことに対する、老女の違和感が描かれる。



啓発チラシ 豊川用水営農促進協議会 昭和36年(1961)  
 豊川用水の啓発チラシ。主に耕地整理の重要性が強調されており、用水建設と同時に農地の整備が行われていたことがうかがわれる。結果として9割以上の農地が整理された。

◆昭和20年と通水後の耕地比較図



国土地理院 土地利用図より 藤城信幸氏作成

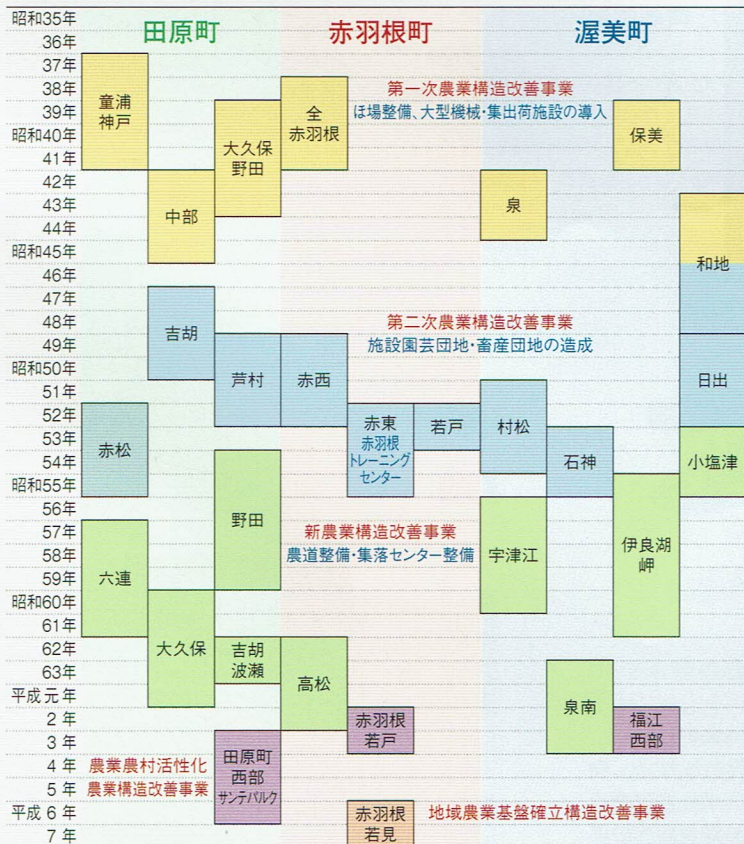
比較すると、大幅に耕地が広がったことがわかる。豊川用水通水にあわせて、六連付近で開墾が行われ、それ以前にも西山で大規模な開墾が行われた。



農業ノート

昭和31年~平成14年 個人蔵  
 若い農業者の中には、細かに毎日農業ノートをつけ、技術の向上を図る者も多くいた。この農業者は昭和31年から平成14年までノートをつけ、日本農業賞という賞を受賞している。

◆渥美3町の農業改善事業



「田原赤羽根史現代編」「渥美町史現代編」より 藤城信幸氏作成

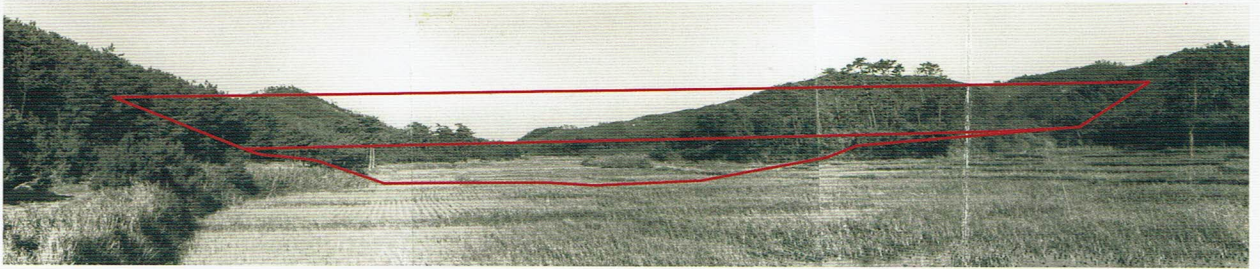


赤羽根施設園芸団地

昭和49年(1974)ごろ 個人蔵  
 赤羽根町で初めて建てられた施設園芸団地。

第一次事業では、耕地整理や施設の導入など、地区全体の農業環境の向上が図られた。第二次事業では施設園芸・畜産団地等の農業生産にかかわる設備が造成され、個別の農業法人への直接的な支援が行われた。それ以降の事業では主に農村に必要な道路や集会場などの施設の整備が主に行われる。

# 田原市にある豊川用水の重要施設



※田原市所蔵の写真を修正した。

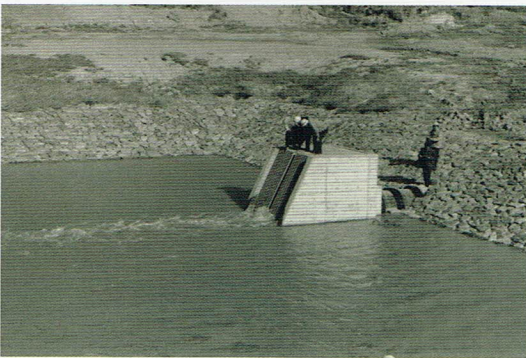


## ◆初立調整池建設予定地古写真 昭和40年頃

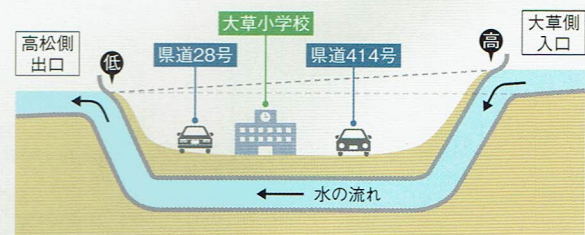
初立調整池は昭和43年に豊川用水の幹線路の末端部分に作られた調整池です。ここまで流れてきた水はこの調整池にためられ、伊良湖周辺の農地へ供給されていきます。この調整池がなければ、余剰となった用水はすべて海へ流れ無駄になってしまいます。この古写真の赤色で示された部分にダムが築かれます。

## ◆初立調整池 (独)水資源機構蔵

初立調整池は谷の前方と後方に堤(ダム)を設けた、人工的な池です。開水路では導水されず、伊良湖サイホンによって、地下から水が湧き出るように流れてきます。貯水量は160万tで、堤(ダム)の高さは主堤(手前)が22.5m、副堤(奥)が12.5mです。



## ◆初立調整池サイホン出口 昭和42年 渥美郷土資料館蔵



## ◆伊良湖東大寺瓦窯跡出土瓦 鎌倉時代 田原市指定文化財

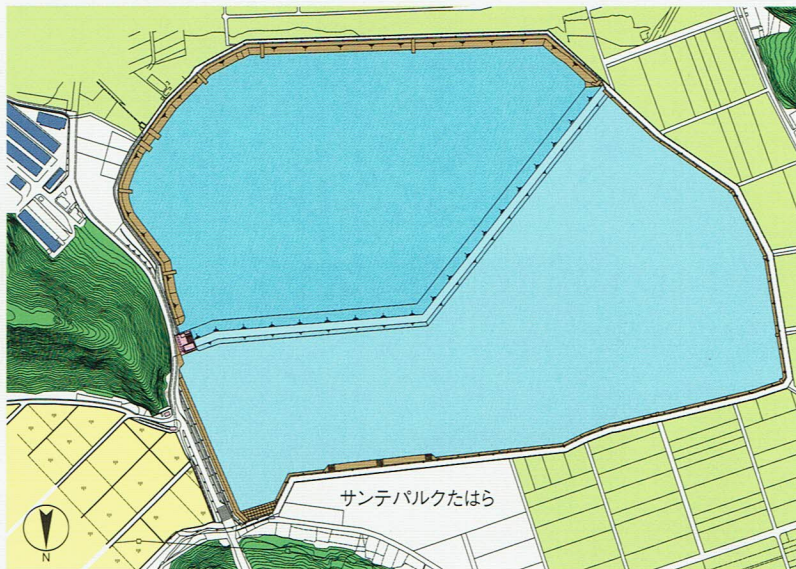
初立調整池を造成するにあたって、付近の発掘調査が行われました。発掘が行われた場所は瓦場と呼ばれており、瓦が焼かれていたと江戸時代からいわれている場所でした。そこで見つかったのがこの鎌倉時代の東大寺瓦で、建久6年(1195年)に再建された東大寺に使われたものです。





◆ 芦ヶ池調整池 (独)水資源機構蔵

芦ヶ池は古代に田原市野田町沖田を中心とする水田に水を供給するために堤防を築いて作られた人工的な池といわれており、渥美郡一の米どころであった野田の農業を水源として長い間支えてきました。



※(独)水資源機構より提供の図面を加工、彩色をおこなった。

◆ 芦ヶ池調整池図面 (独)水資源機構蔵

芦ヶ池の貯水量はもともと、96万tでしたが、豊川用水の調整池として整備するにあたって、1mの堤防の嵩上げと図面で濃い青で示した部分の掘削工事(昭和62年~平成7年)が計画され、200万tの貯水量となりました。この水は、用水の不足が発生した際にポンプによって幹線に送り出されます。豊川用水の安定的な運用になくてはならない「調整池」としての役割を芦ヶ池は担っています。



◆ 高松サイホン

大草から高松まで2,726mの長さのサイホンで二川サイホンに次ぐ長さを持ちます。サイホンは入り口より出口が低ければ、どんな深い谷があっても水が流れます。宇連ダムから伊良湖の先端まで自然流下で水を届ける豊川用水にとって、できるだけ水路の高度を確保することは重要なポイントです。高松サイホンは二つの県道と大草小学校の下をくぐって、高松と大草を結んでいます。



◆ 木製の農具や馬具 古墳時代

芦ヶ池は古くから何度か改修され、その水域を広げてきました。そのたびに、芦ヶ池のほとりに住んでいた人々の生活の痕跡が池底に保存されることになりました。調整池として整備されるにあたって、発掘調査された池の北岸にある山崎遺跡からは、古墳時代の農具等が出土し古くから、この付近で人々が農業を営み生活してきたことがわかります。



1. 井戸水での洗濯 昭和20年頃
2. 柄杓での水くみ 昭和20年頃
3. 自衛隊の協力による宇津江地区の耕地整理作業  
渥美郷土資料館蔵 昭和40年頃
4. キャベツの定植(西山地区)  
渥美郷土資料館蔵 昭和40年代
5. 赤羽根での豊川用水幹線工事 昭和42年頃
6. 豊川用水初立調整池完成式  
渥美郷土資料館蔵 昭和43年



|| 取材協力 ||

岡田公一 葉山茂生 藤城信幸 中島俊次 宮田誠一郎 宮本喜弘  
旧赤羽根町土地改良区 飛鳥建設(株) 野田校区コミュニティ協議会  
(独)水資源機構 和地地区コミュニティ協議会

|| 参考文献 ||

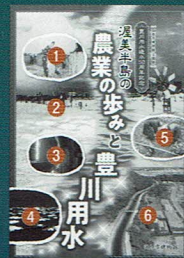
- 「田原町史中巻」 田原町教育委員会 昭和50年
- 「田原町史下巻」 田原町教育委員会 昭和53年
- 「赤羽根町史」 赤羽根町教育委員会 昭和43年
- 「渥美町史現代編」 渥美町教育委員会 平成17年
- 「田原赤羽根史現代編」 田原市教育委員会 平成29年
- 「豊川用水」 愛知用水公団 昭和43年
- 「豊川用水史」 豊川用水研究会 昭和50年
- 「豊川用水史(資料編)」 豊川用水研究会 昭和50年
- 「研究紀要第一号」 渥美町郷土資料館 平成8年
- 「愛知農業試験研究100年史」 愛知県農業総合試験場 平成6年
- 「日本農業史」 木村茂光 平成22年
- 「地域と産業」 地方調査機関全国協議会 昭和44年
- 「野田史」 野田区自治会 平成14年
- 「施設型農業の展開」 久野重明 平成10年
- 「東三河の農水産業」 東海農政局 昭和53年 ほか

|| 謝辞 ||

本展覧会開催にあたり多くの方々にご助言・ご協力をいただきました。お礼を申し上げます。また、本展覧会を通して渥美半島の発展は水源地域の方々のおかげであることを再確認しました。改めて豊川用水建設に尽力いただいた先人に感謝を申し上げます。

|| 凡例 ||

- 本パンフレットは、平成30年7月14日から9月2日まで田原市博物館で開催する企画展「豊川用水通水50周年記念 農業の歩みと豊川用水」の際に作成されたものである。
- 本パンフレットに所蔵等明記のないものは田原市博物館蔵である。
- 本展覧会の企画及びパンフレットの編集は田原市博物館学芸員山本隆大が担当した。



1. 「麦の収穫」  
昭和30年頃 個人蔵
2. 「中山地区の風車灌漑」  
昭和初期 御厨野文庫蔵
3. 豊川用水二期工事  
赤羽根下流工区工事の様子
4. 「電照菊の夜景」  
昭和40年代後半  
(独)水資源機構蔵
5. 「サツマイモのつるさし」  
昭和30年頃 個人蔵
6. 「高松周辺の豊川用水路」  
平成29年 (独)水資源機構蔵

|| 田原市博物館 平成30年企画展 ||

豊川用水通水50周年記念

渥美半島の農業の歩みと豊川用水

平成30年7月14日(土)～9月2日(日)

発行◎2018(平成30)年7月

編集・発行◎田原市博物館

〒441-3421

愛知県田原市田原町巴江11番地1

制作◎株式会社シンプリ

田原市博物館